

2025年4月20日 イースター礼拝 復活節 第1主日 週報番号3460号

説教題：「復活の主（キリスト）に会う」

聖書箇所：ルカによる福音書24章13-35節（160頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讃美歌93 - 1 - 45 交読詩編：詩編111編1 - 10節（125頁）

讃美歌：83/328（ハレルヤ、ハレルヤ）/493（いつくしみ深い）/495（しずけき祈りの）/27

「今週の聖句」 「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かった…」

（ルカ伝24：30 - 31）

「牧師室の窓」 「復活の主の御言葉に導かれ幾（行く）山河を歩む嬉しさ」

「人の身は神の愛受け生かされつ復活の主の御声聞きつつ」

(1) 皆様おはようございます。本日は復活日・イースターの礼拝を皆様と共に参加できますことに感謝します。イースター礼拝は十字架の刑で亡くなられたイエス・キリストが翌々日の日曜日の朝に復活なされたことを記念する礼拝であります。初代教会以来、約2千年に亘って行なわれています。

イエス・キリストが処刑されたのはユダヤ社会で最も大切な祭礼・お祭りである「過越しの祭」の期間中でありました。「過越しの祭」とは、古代エジプト王朝時代に奴隷生活をしていたイスラエル部族が、神によって救い出されたことを記念する行事です。祖先が苦しんでいた奴隷解放記念日と申し上げれば分かり易いでしょう。当時のユダヤ社会の1日は夕方の日没から始まり、翌日の日没までです。ユダヤ教では土曜日とは、天地創造の神が休みの日とされた聖なる「安息日」です。働くことも一定以上の距離を歩くことも禁止され、家の中で過ごしていなければなりませんでした。

イエス・キリストは金曜日に十字架の刑罰で処刑され、日没までに岩をくり抜いたお墓に格納されました。金曜日の日没から聖なる土曜日「安息日」が始まりますので、その前に埋葬されたのです。その翌々日の日曜日の朝、イエス様は復活をされました。初代キリスト教会は、この十字架と復活の出来事を「罪と死からの解放の記念日」として伝え、今日の私たちにまで伝えられてきました。

イースターの日、クリスマスが12月25日の確定日であるのとは異なり、毎年変動します。

それは、春分の日後の満月の次に来る日曜日であるからです。年によっては、3月下旬から4月下旬と幅があります。例えば、西暦1900年から2100年までの2百年間で、最も早いのは3月23日であり、最も遅いのは4月25日です。因みに、私が洗礼を受けた年(52年前、1973年)のイースターは4月22日でした。

(2) 前置きが長くなりました。新約聖書はイエス様が復活された場面を3つ記しています。

1つ目は、日曜日の朝にお墓へと様子を見に行った女性たちに現れ、

2つ目は本日の聖書箇所に書かれている様に二人の弟子に現れました。

3つ目は、11人の弟子たちに現れました。

扱(さ)て、今日の聖書箇所として始まる13節14節を見てみましょう。〔(24:13)ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、(24:14)この一切の出来事について話し合っていた。〕と書かれています。エルサレムの町は北緯32度であり、日本で言えば九州は宮崎県の宮崎市の緯度に当たります。春の始めにはアーモンドの薄ピンク色の白い花が咲きます。アーモンドは桃や桜と同じバラの仲間で、花が咲くのは早春の頃です。

「エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村」と書かれています。「六十スタディオン」とは、約11kmです。二人の弟子がエマオの村に向かって、話しながら歩いていました。イエス様が捕らえられ十字架で処刑されたこと、きょうの朝、埋葬された岩穴の墓にイエス様の遺体がなかったこと、先生はご自分で3日後には復活すると言っておられたこと、などなど、「一切の出来事」を話しながら3時間ほどの道のりを歩いていました。二人の会話は結論が出るというものではありません。先生の遺体はどうなってしまったのだろうか、3日目に復活するとは何の事であろうかと、腑に落ちない事ばかりが繰り返していたことでしょう。

(3) そのように「話し合い論じ合っている」見知らぬ人が二人に近づいて来て「一緒に歩き始められた」のです。次に書かれている16節が重要ですね。〔(24:16)しかし、二人の目は遮(さえぎ)られていて、イエスだとは分からなかった。〕復活されたイエス様がこの二人と共に歩かれたのです。二人の弟子たちは、ガリラヤ地方でも、エルサレムに来る道中でも、エルサレムに来てからも共に生活をしていたのですから、今ともに歩いている人がイエス様であることが分からない筈はありません。どうしてでしょうか。ヒントとして、マルコによる福音書16章12節には〔(マルコ伝16:12)イエスが別の姿でご自身を現された。〕と書かれています。どの様なお姿であったのかは記されてはいません。併し、本日の聖書箇所には「二人の目は遮(さえぎ)られていて」と書かれています。目は開(あ)いているのですが、見ている物がなんであるかを判断することができないのです。「遮(さえぎ)る」とは、ギリシア語の元の意味は「塞いでいる、引き留める、妨げる」という意味で、何かに支配されており、行動力や判断力を失っている状態を示しています。

この言葉の意味や状態は私たちの日常生活にも当てはまるでしょう。自分自身では、正常であり、正常な判断をしているとしても、実は「目が遮(さえぎ)られて」いることはしばしばあります。自分一人ではそのことが分かりませんが、家族との話の中で、職場での行動の中で、自分では正しいことだと思っても、判断が足りなかった、思いが不十分であったと感ずることがありますでしょう。でもその様に感ずることは大切なことです。例えてみれば何らかのリトマス試験紙がなければ、人間の判断力は自分勝手になってしまうからです。私は信徒時代の職業人時代に、上司を含めて話し合う、議論する機会が多々ありました。職位・職責の上下に拘わらず、自由な意見、併(し)か、責任ある考えを言うことを良しとする職場でした。真剣な議論ですからぶつかり合うことが避けられません。その様な時には、問題解決のために考えることがお互いの理解を深めることが近道となります。お互いにすっきりとするのです。

(4) 17節～27節にはイエス様と二人の弟子たちとの歩きながらの話の内容が書かれています。イエス様が二人の弟子が話している内容を尋ねると、〔(24:17)…二人は暗い顔をして立ち止まり、〔(24:18)…エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはお存じなかったのですか〕と、この事件のことを知らないことに、憤慨しているようです。

併(し)か、続いて書かれている弟子たちによる事件報告は中途半端な理解による事実認識でありました。何故ならば、19節には〔(24:19)…二人は言った。「…この方は…行いにも言葉にも力のある預言者でした。」〕21節には〔(24:21)わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。〕と説明しているのです。弟子たちは生前のイエス様のことを「預言者、解放者」と理解していたのです。加えて、22節～24節には、「仲間の婦人たちが朝早く墓へ行きましたが、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。あの方は見当たりませんでした。」生前のイエス様が弟子たちに対して、よみがえることを伝えていたのですが、弟子たちは理解していなかったことが浮き彫りになります。

この様な話をしますと、世間では馬鹿馬鹿しい、聖書の話は信じられないと言うことになるでしょう。併し、そうではありません。聖書に書かれていることの基本は、人を信じる、神を信じ

ると言うことに他なりません。人を信じると言うのは、オレオレ詐欺や特殊詐欺犯罪の言葉を信用しなさいと言うことでは勿論ありません。人間として生まれ、この人の世を生きるについて、何が正しくて、何を信頼して生きるべきかを、聖書は私たちにその糸口を示しているのです。死者が生き返るかどうかは、生物学や医学の判定です。キリストがよみがえる信仰を持つことは人生の生き方であって、生物学や医学が判定すべき事柄とは異なります。小さな子供が大人になってからの人生行路の中で、迷い戸惑う中であって、信仰の力がその人に人生を切り開く判断力と勇気を与えることでしょう。

私は学生時代に、中学や高校の教員資格を取る授業の中で、福沢諭吉の「学問のすすめ」や「文明論之概略」を読みました。受講した学生は僅か7人、予習復習と授業の90分間は厳しい鍛錬の場でした。福澤諭吉はキリスト教を非難したのですが、自分の子供たちにはキリスト教宣教師によって教育を受けさせました。これが実態なのです。物事を外面的に表面を見て判断してはなりません。

(5) 26節27節を見てみましょう。イエス様は〔(24:26)メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。〕(24:27)そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。〕のです。二人の弟子がイエス様と共に夕食を取る場面が続きます。30節31節です。〔(24:30)一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。(23:31)すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。〕30節に書かれている「賛美の祈りを唱え、パンを裂いて」とは単なるいただきますではなく、神への感謝である聖餐式であると読むことができます。「二人の目が開(ひら)け、イエスだと分かった」とは、聖餐のパンとぶどう酒(ぶどうジュース)、即(すなわ)ち、日常に存在する食物が聖餐式の祈りによって人間の目を開かせる力となる、つまり、「束縛からの解放」であります。

また、「目が開(ひら)け」とは今までと同じ境遇にあっても物の見方が180度変わることを言います。別の言葉で言えば、希望がない状態から、希望を持つことができる状態になったのです。

そして、「その姿は見えなくなった」とは、居なくなったということの意味しません。もう、見える必要がなくなったのです。見なくても、復活の主イエスと出会い、命の秘義を知らされたからであります。私たちも、聖餐をいただくごとに、洗礼に感謝し、復活のキリストの臨在に触れるのです。この復活のキリストの臨在こそ、教会の命なのです。教会は、主義・主張によって集まる人々の集団ではありません。復活のキリストのご臨在に触れ、心を燃やされた・燃やされ続ける、復活の証人の一人ひとりの集団なのです。

32節には〔(24:32)…二人は…わたしたちの心は燃えていたではないか、と語り合った〕と書かれています。…この「心は燃えて」いるとは、私たちに励ましてくれる言葉ですね。これは年齢には関係がありません。私たちは、この世の生活から天の国に入るその時まで「心は燃えて」いるのです。何故ならば、その理由は「復活の主(キリスト)に会った」からであります。35節

〔(24:35)二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。〕私たちが、あなたも、私も、イエス・キリストに出会ったのです。

復活の主と共に人生の日々を歩んで参りましょう。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちは、主の復活・イースターの日を迎えることができました。その礼拝に招かれありがとうございます。キリストが歩まれた道に思いを馳せて、神の恵みに感謝します。これからも信仰を導いて下さいますようお願いいたします。

神が創造されましたこの地球上では、大規模な地震や災害で、とどまることのない戦争で、多くの人々の命が失われ、多数の負傷者が出ています。慰めがありますように、救助がなされますように。食べ物が行き渡りますように、病気の心配がありませんようにお守りください。

私たちに知恵と勇気をお与え下さい。

教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 **アーメン**